

2010年11月2日―3日に、ドイツ、エアランゲンのフリードリヒ・アレクサンダー大学で開催された国際会議「Religion and Media: Transcultural Perspective」に参加するためにドイツを訪問した。ドイツに初めて行ったのはかれこれ十年以上も前で、今回が二度目である。初めてのドイツは、デンマークに滞在中、たった一日北ドイツを観光バスでまわっただけだったため、とても印象が薄い。とにかく北ドイツで覚えているのは見渡す限りの牧草地とホルスタインばかり、観光バスが訪れた街がどこだったかも覚えていない。よくわからないうちに訪れた街のショッピングモールで毒々しい色をしたグミをお土産に購入した記憶がある。今回の滞在は5日間、おそらく荒涼とした北ドイツより南ドイツはずっと自然が豊かだろう。会議の開催地エアランゲンは、あの反ユダヤ・アーリヤ至上主義の作曲家ワーグナーの代表作『ニュルンベルクのマイスタージンガー』で知られるニュルンベルクに近い学園都市である。近郊には有名な観光地も点在している。きっとホルスタインのイメージも払拭されるにちがいないと、大いに期待した。予想にたがわず、今回のドイツ滞在は、会議への参加によって得た知見ばかりでなく、多くの新しい発見ができたと思う。

1. オペラ鑑賞記

ドイツといえば音楽の国、音楽研究の間にはドイツ音楽の専門家も多い。そもそもドイツでは、なぜ西洋を代表するクラシック音楽の作曲家が多く誕生したのだろうか。歴史的な側面からみると、18世紀後半から19世紀前半ごろのドイツは、まだヨーロッパの中の後進国だった。こうした作曲家の多くはヨーロッパ各地に出稼ぎに行き、次第に名をなしていった。ドイツも音楽をナショナルな文化として、国をあげて大々的にプロモートしたのだが、それは、フランスやイタリアといった古い伝統と先進的な文化を誇る国々、あるいは武力と経済力で植民地大国として君臨するようになった大英帝国に対抗してナショナルな精神を高めるために、唯一誇れるものだったからだともいえる。

古典派からロマン派に至る時代、ヨーロッパでもっとも人気のある作曲家はヨゼフ・ハイドンだった。私は7月に北海道大学で開催された第6班主催の国際会議で、1800年前後のインド、タンジャーヴールのマラーター宮廷における西洋音楽の受容について発表したのだが、宮廷に残された多数の楽譜や宮廷付楽団によって演奏された作品の中で、ハイドンの存在は際立っている。これらの楽譜は、ほとんどイギリスの楽譜出版社からかなり無作為に取り寄せられたものであるため、当時、イギリスで活躍していた作曲家の作品が多数を占めている。その多くは、今日、日本ではほとんど演奏されることがない。しかし、日本人なら一度は耳にしたことがあるだろうベートーヴェンやモーツァルトの楽譜はほと

んど含まれていない。すなわち、インドに残された楽譜は、しばしば語られるハイドンの全ヨーロッパ的人気を裏付けているとさえいえるだろう。

さて、ドイツにはどの地方都市にも立派な音楽ホールがあるという。実際、戦後日本に次々と誕生した地方都市のアマチュア・オーケストラや合唱団などは、そうした主張のもとに、音楽文化の育成と音楽ホールの建設を訴えた。その結果は、みるも無残なお役所仕事、結局作られたのは音響を無視した多目的ホールばかりで、建設会社を潤わせるだけのインフラ設備への投資で予算を使い果たし、音楽文化という目に見えない人的資源に投資されることはなかった。実は、私の父は、昭和 29 年に設立されたアマチュアオケ、岐阜交響楽団に設立当初からヴァイオリニストとして所属していた。私自身は小学校 5 年生から中学校 3 年生まで地元の少年少女合唱団の団員で、大学卒業後からインドに留学するまでの約 2 年間は、合唱団の指導を行っていた。子供のころはわからなかった行政の現実を、父との会話や自分自身の経験から思い知ったわけである。

では、ドイツの実際はどのようなのだろうか。ニュルンベルクは地方都市だが、毎日のようにクラシック音楽のコンサートがある。立派な州立劇場(オペラハウス)が駅の近くにあり、毎晩、日替わりの演目を上演している。音楽を研究する者として、これを見ないわけにはいかないだろう。滞在最終日の夜、私は一人でオペラ鑑賞にでかけた。ドイツは夜一人で電車に乗っても比較的安全で、しかも英語ができる人が多いので動くのにさほど困らない。なお、エアランゲンにも劇場があって、毎晩出し物があるのだが、こちらは現代的な新作劇が多いようである。



ニュルンベルクのオペラハウス

ニュルンベルクのオペラハウスはターミナル駅から徒歩 10 分程度、地下鉄では一駅、オペラハウス前で降りて階段をのぼれば建物は目の前である。このオペラハウスは 1905 年の建築で、ドイツでも比較的広い舞台を備えた立派な建物である。外壁には美しい彫刻がほどこされており、国内で最も美しい劇場の一つとされている。客席は 3 階まであり、イスの座り心地も雰囲気もよい。チケットは一番高い席が 53.9 ユーロだったが、私は上から 2 番目の席を購入した。1 階席の真ん中あたりなので、それでも十分良い席である。ちなみに、一番安い席は日本円にすれば 1000 円程度なので、あまり金のない学生でも買えるリーズナブルな値段である。日本で海外の団体のオペラ公演を鑑賞しようものなら数万円とられるだろうから、とても得した気分になれる。オペラといえば、着飾った人々が集まって開始前や休憩中にワインやシャンパンを飲みながら談笑するといったイメージが強い。実際、会場には確かにそのような光景もみられたが、ジーンズの若者の姿もあり、結構庶民的な雰囲気、客の年齢層も幅広い。

その日の出し物はモーツァルトの代表的ジグシュピール『魔笛』、あの「夜の女王」の技巧的なコロラトゥーラが有名な名作だった。モーツァルト自身が会員だったというフリーメイソンの教義をシンボライズしているといわれ、古代エジプトが舞台なので、見る前は古代文明を表すような演出を想像していたのだが、なんと、設定は現代だった。とにかく驚かせてくれたのが夜の女王。毛皮のコートにロングドレスを来た場末のクラブのママで、確かに夜の女王には違いないのだが………酒瓶片手に酔っ払ってタミーノにからんでくる。ザラストロはまるでマフィアのボス、古代エジプトの僧院はマフィアの本拠地で手下たちが酒を飲みながらトランプやダーツで遊んでいる。モノスタートスはどうみてもさえない金持ちオヤジ、パパゲーノは黒の革ジャン革パンでチンピラか暴走族のリーダー、パパゲーナは塩化ビニール製の老女マスクをかぶっていて、ぱっとマスクをとると若い女の子に変身する。タミーノは気の弱そうな青年、三人の童子はヘリコプターに乗ってやってくる。火と水の試練は夏のアルプスに真冬のスキー場といったぐあい。ラストシーンはなんと真夏のビーチで、出演者全員でビーチ・パーティを開きながらイシスとオシリスを讃える歌を合唱し、なぜかザラストロと夜の女王が手に手をとって飛行機で新婚旅行に旅立つ。

生のオーケストラが伴奏し、音楽もセリフもオリジナルのままなのだが、とにかく演出だけはブツとんでいて、本当に驚かせてくれた。観客は上演中に笑い転げていたが、歌手のレベルは高く、ちゃんと夜の女王やザラストロのアリアには拍手やブラボーの声がかかり、カーテンコールではスタンディング・オベーションがおこった。出演者の中には東洋系の顔立ちの人もいた。ドイツ語の字幕もついているのだが、私は、ドイツ語は大学生のときに習って以来、まったく使っていないのですっかり忘れてしまった。しかし、言葉がわからなくても思わず吹き出してしまうシーンもたくさんあって、こんなに面白いオペラは今まで見たことがない。翌日の出し物はあの有名なプッチーニのオペラ『蝶々夫人』だったのだが、残念ながら私は帰国しなければならぬ。ぜひ他の演目も見なかった。これ

は絶対に一見の価値があると思う。

ところで、日本でこのような演出で上演したら、どんな反応が起こるだろうか。一部の保守的なクラシック・ファンは怒るだろうか。しかし、こうした大胆な演出で観客を楽しませるすべを心得ているからこそ、若いファンもついてくるのだと思うし、守るのだけが伝統ではない。こうして現代的にアレンジされ、日々更新されるからこそ、伝統は偉大であり続けるのだと確信した。

2. ドイツのサブカルチャーはかなりヤバイ？

私は海外に行くとき必ず音楽ショップをチェックするようにしている。ドイツといえばクラシック音楽のイメージが強いのだが、実はヘヴィメタル・ファンが多い国でもある。その理由をはっきり説明することはできないが、ナチスファシズム—右翼—自動車産業とくれば、なんとなくイメージ的にはつながりそうな気がする。日本でもジャーマン・メタルというサブジャンルと呼ばれるほど、ドイツはハードロック／ヘヴィメタル・ファンの間では有名な国なのである。地元エアランゲンのスーパーの地下にある比較的大規模な音楽ショップに行ってみると、予想に違わずヘヴィメタルのコーナーが一片全部を占拠していた。そのなかには日本でもよく知られたアメリカやイギリスのバンドのアルバムも含まれているが、日本にはまったく紹介されていないようなドイツのアンダーグラウンドで活動するバンドのアルバムも数多い。ドイツでは頻繁にヘヴィメタル・フェスが開催され、ニュークリア・ブラストのような世界的に有名なメタル専門レーベルもドイツを拠点としている。

ところで、なぜこの節に「ヤバイ」とつけたかという、ヘヴィメタルにも悪魔だの地獄だのと危険な香りが満載のテーマを扱ったものが多いのだが、なにより、ドイツのアンダーグラウンドな映画の世界には露骨で容赦ない残酷モノが蔓延していることは、私を含めたホラー映画ファンの間では有名な話だからである。日本でよく知られたカルト的人気を誇る監督には、死体しか愛せない女を描いた『ネクロマンティック』(1987)で有名なユルグ・ブットゲライトや、東ドイツからの移民をソーセージにして売る東西国境の店を舞台にした『ドイツ・チェーンソー大量虐殺』(1991)で有名なクリストフ・シュリンゲンズィーフ(1960-2010)がいる。特に私は後者のファンでもある。というのもシュリンゲンズィーフの作品は単なる残酷モノというわけではなく、異様な世界観を表現した作品や社会批判や世相の風刺がきいた作品が多いからである。

「ドイツ・チェーンソー」という、いかにもあぶないタイトルだけから判断してはいけない。シュリンゲンズィーフは演出家としても有名で、バイロイト音楽祭でワーグナーの楽劇『パルジファル』の演出を2004年から2007年まで務めたぐらいの有名人である。彼のワーグナーがどのようなものだったのか、どうしても見たくてDVDが発売されていないか、エアランゲン中の店を探し回ったが、残念ながら見つからなかった。もちろんネット

でも見つからない。やはり DVD 化されていないようである。日本では彼の演出は酷評されていたし、ドイツでの評判も賛否両論、物議をかもした。しかし、もともとシュリングエンズィーフ作品の超個人的で不気味な世界に不快感をおぼえる人や、彼の風刺精神が理解できない人には、彼の演出の面白さがわかるはずはないと個人的には思う。そもそも、彼が保守的なワーグナー・ファンにウケるような演出をするはずがないのである。そんな日和見主義的な演出をされたら、逆に彼のファンは離れていくにちがいない。それにしても、ナチス・ドイツを風刺しまくっているシュリングエンズィーフに、反ユダヤ主義ドイツの権化のような作曲家ワーグナー(イスラエルではつい最近までワーグナー作品は上演されなかった)の音楽祭であるバイロイトでの演出を頼むとは、それだけでもドイツは面白い。

さて、音楽ショップに話を戻そう。一番ヤバイと思ったのは、キッズ向けの DVD コーナーの並びに 18 禁の DVD が堂々とおいてあったことである。つまり、一列の DVD コーナーに、順に年齢を書いた札がはさんであるだけで、日本のように囲いのあるアダルト専門の一角を設けていないことである。しかも、18 禁 DVD の多くは、日本のような普通のポルノというよりは、相当に刺激の強いジャケットから判断する限り、見るからに露骨な血みどろ残酷モノが圧倒的に多い。東京都で性表現に制限をかけて漫画家たちから総スカンをくらっている石原慎太郎ではないが、表現の自由をここまで許すとは、ドイツはなんと大らかな国なのだろう。だからといって、ドイツの子供がみんな歪んだ精神をもって育てているとはきいたことがない。また、自然環境や景観保護については世界の先進国とされるドイツ、少なくとも表現の自由と自然保護は両立するということである。

3. 国際会議「Religion and Media」について

印象の強かった出来事ばかりを紹介していたら、すっかり会議の話は後回しになってしまった。この会議は、2010年7月に開催された第6班主催の国際会議にも参加していたワジム氏の所属するフリードリヒ・アレクサンダー大学宗教学学科とウラジーミル大学との提携研究の一環として開催されたもので、ほとんどの参加者はドイツ国内とロシアからである。会議では2009年のヴォルガ旅行の際にウラジーミルで出会ったハレ・クリシュナの研究者、アレクセイにも再会した。私の発表は「Interactions between Missionaries and Native Christians on Music in South India: Constructing Hindu-Christian Identity」と題して、18世紀末から20世紀初頭にかけて、南インド古典音楽(カルナータカ音楽)の音楽家または理論家として活躍した4人のタミル人・非バラモン・キリスト教徒の活動を取り上げ、バラモン中心に構築された従来の南インド音楽史に対するオルタナティブな歴史を提示しようとするものである。彼らは、キリスト教宣教師やヨーロッパ人との交流を通じて、徐々にヒンドゥー・キリスト教徒としてのアイデンティティを構築していくことになった。

さて、この国際会議に参加して最も強く感じたことは、ドイツ人とロシア人のアプロー

チの違いだった。概して、ドイツ人研究者は事例分析のための理論モデルを構築しようとする傾向がみられる。インドに宣教師として赴任した経験ももつ同学科のネーリング教授の発表は、1980年代ポストモダンの時代を経験した新しいメディア研究の理論的潮流を俯瞰し、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究が提示した表象の権力の脱構築、メディア論的にいえば、テキスト分析としてのコード化と脱コード化の過程、そこで明らかにされてきた文化の二つの次元、遂行的 **performative** 次元と明示的 **explicit** 次元の区別が宗教学にも有効であると論じたものであった。端的に言って、ネーリング教授の論じる宗教の遂行的次元とは宗教的な経験・体験をさし、明示的次元とは教義・テキスト・儀礼をさす。しかし、私自身は文化というものは遂行的にしか存在しえないのではないかと思う。教義や儀礼は遂行されること(微妙に変化しつつ繰り返し再現されること)によって、それ自身として維持されるのではないだろうか。古代に成立したテキストは脱コード化の繰り返し、すなわち遂行されることによって権威が維持されてきたのではないだろうか。テキストそのものは「物理的」に固定化されたモノとしてそこに「ある」としても、脱コード化が行われなくなったならば、認識可能な形で「存在する」とはいえないのではないか。メディア論的にいえば、コミュニケーションされないということになるのではないか。

ロシアの研究者のほとんどは表象分析に終始していた。すなわち、宗教的シンボルがメディアで多用されているという事例紹介がほとんどで、コード化の過程に主眼がおかれ、それを研究者本人が脱コード化してみせるというレベルにとどまっており、異なった文化的文脈では異なった意味に脱コード化される可能性については言及されることがなかった。そこで最も欠落しているのはオーディエンスの存在である。イギリスのカルチュラル・スタディーズにおけるメディア研究で最も重要視されてきた方法に、オーディエンスのエスノグラフィーがある。そもそも「メディア」をテーマとしながら、今回の会議に最も欠落していたのがオーディエンス研究だったと思われる。私自身の今回の報告はオーディエンスに焦点をあてたものではなかったのだが一歴史研究のつもりなので、少なくとも、宗教的シンボルのメディアにおける流用をテーマとするならば、オーディエンス研究は不可欠ではないだろうか。その意味では、少々もの足りない感はぬぐえない。

高橋さんいわく、このプロジェクトでは、ロシア人が先進的なドイツから研究方法論や理論を学ぶというレベルなのだという。では、ドイツ人研究者がやたらと理論モデルにこだわるのはなぜなのだろう。少なくとも、私自身は理論モデルの前に資料あり、フィールドワークと一次史料の収集こそを最も重要な研究のベースとして、あるいは信条としてきたつもりである。理論というものは、経験に基づいて体で理解してこそ自らのものとして語ることができるように思う。いずれにせよ、国際会議の醍醐味は、研究者の出身国の社会状況や受けてきた教育によって異なるアプローチを肌で感じられるところにもある。それによって、自分自身を客観的に省みる機会を得ることができるならば、それだけでも参加する価値は十分にあるというものだろう。

4. 最後に

今回のドイツ滞在はほんとうに楽しかった。南ドイツは当初予想したよりは寒くなかったし、景色は美しいし、食べ物もまずくない—以前に訪問した北ドイツの料理は正直おいしくなかったし、野菜の種類が少なくて悲しかったが。エクスカーションで訪問したロマンティック街道、中世の街並みそのままを今日まで残す、ひととき美しい古都ローテンブルクに来ていた日本人の団体旅行客の年齢層はかなり高そうだった。年老いても安心して旅行できるドイツ、年老いてから訪問するにはかなりの覚悟が必要なインド、このまま年をとったらインド研究がいやになってしまいそうだと思ったものである。しかし、翌12月には相も変わらず刺激的なインドへ。まだまだ引退するには早すぎるということか。



ローテンブルクの街並み